「プロスポーツ」の概念的考察

高岡英気*

A Conceptual Inquiry into “Professional Sports”

TAKAOKA Hideki *

Abstract

In the present age, “professional sports” have widely permeated our society. On the one hand, professional sports are indispensable to aid in the development of sports culture as well as for the development, advancement, and spread of sports technology and facilities. On the other hand, in various domains, from everyday language to scientific research, the phrase “professional sports” is still ambiguously used.

From the above viewpoint, this study aimed to clarify the meaning of the phrase “professional sports” by analyzing it on a conceptual level. We analyzed the concept of “sport” by comparing it to the concept of “amateur sports” and “play.” Using the categorical theory as the philosophical method, we defined the concept of “professional sports.”

We found that the concept of “sport” can be reorganized into two categories: “substance” and “relation.” The phrase “sport” may be understood to have two meanings: “sport as a substantive culture” and “the relationship between sports and people.” The former corresponds to “substance” and the latter to “relation.” “Professional sports” are included in the latter. Sports as a substantive culture, has a complex structure composed of three moments—physical, intellectual, and sensitive. Therefore, we concluded that “professional sport” is a relationship between such a structure and specific people.

Key words: amateurism, play, substance, relation, sports structure

1. 緒　言

「プロフェッショナル・スポーツ」（以下「プロスポーツ」）という言葉を耳にするとき、多くの人はプロ野球やJリーグ、大相撲といった具体的な対象をイメージするのではないだろうか。現代社会において、こうした「プロスポーツ」は人々の生活の中で大きな位置を占めている。新聞やテレビニュースにおいて、「プロスポーツ」に関する情報は、今や政治、経済等と並ぶ重要なコンテンツである。人々は日々のゲームの結果や優勝争いの行方に一喜一憂し、それは時に、1千億円規模の経済効果に繋がることもある[1]。

だが歴史を振り返ってみれば、「プロスポーツ」という対象に対しては、いわゆる「アマチュアリズム」の立場[2]から批判が繰り返されてきたという事実がある。1936年のベルリンオリンピック大会組織委員会の事務総長であり、ドイツ・ケルン体育大学の初代学長であったC. ディームは、「職業スポーツ（Berufssport）は…『スポーツ』ではなくその反対のものである」[9]（S.25）として、両者を区別しようとした。また、元IOC会長のA. ブランデージは、新聞の欄分けを引き合いに出し、プロスポーツは本来「スポーツ欄」ではなく、「サーカス、軽演劇、あるいは闘牛などの記事と一緒に《芸能娯楽》欄に載せられるべき性質のものなのだ」[7]（p.29）と述べている。

1　2003年のプロ野球阪神タイガースの優勝が関西経済にもたらした経済効果は、およそ1100～1600億円に上るという[38]。

2　『新修体育大辞典』によれば、アマチュアリズムとは「スポーツを生計の第一義的なことがらとしてではなく、みずからの努力により楽しみのための活動として行う、という考え方・態度ないし主張」[16]（p.49）のことである。

*　筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

彼らの主張には、参加することから何ら物質的な利益を得ない「アマチュア」によって行われる「アマチュア･スポーツ」のみを真の「スポーツ」とし、スポーツから何らかの物質的利益を得る「プロフェッショナル」によって行われる「プロスポーツ」を排除しようというイデオロギーが通底しているように思われる。20 世紀の大半を通じて、「アマチュア」が IOC や各国際競技連盟の主催競技会の参加規定に盛り込まれていたことは、当時のスポーツ界において、こうしたイデオロギーがいかに支配的であったかを物語っている[3]。内海によれば、こうした時代においては、「アマが浄く、スポーツの発展にとってプラスであった。一方プロは卑しく、スポーツの発展にとってマイナスの効果をもたらしたという歴史観、スポーツ観が濃厚であった」[40]という。

だがその後、1974 年にオリンピック憲章から「アマチュア」の表記がなくなったことをはじめとして、スポーツ界において厳格なアマチュアリズムは次第に消えていき、近年では、オリンピックにプロフェッショナルが参加することも当たり前になっている。そもそもプロスポーツは、「多くの練習と試合を行い、その高度さ、華麗さを観戦者に見せ」ることによって成立し、その技術は、「やがて大衆的に普及して、広く国民の文化として定着する」と言われるように[40]、今や「プロスポーツ」は、高度な技術の開発やその大衆への普及を担うという意味で、スポーツ文化の発展にとって欠かせない存在である。こうした観点から、体育・スポーツ科学の領域において「プロスポーツ」を研究の対象とすることは意義深いことであると言えよう。

「プロスポーツ」を巡るこうした状況の変化と呼応するかのように、近年では、プロ野球やプロサッカー、プロゴルフ、プロテニス、プロボクシング、大相撲といった個別の「プロスポーツ」を研究の対象とし、様々なデータを用いて実証的な分析を行っている研究が、経済学、経営学等の分野において数多く発表されている[4]。これらの中には、個々の「プロスポーツ」の具体的な実状を知る上で有益な知見を提供するものも少なくない。

だが一方、それらの多くは、球団経営の安定化、集客力の向上、マネタイズの拡大等といった成果を志向する「現場の要請」を受ける形で、実学的な方向性において成されている。そこでは、かつてアマチュアリズムのイデオローグたちによって為された、「プロスポーツ」に対する原理的な批判に正面から答えるといった作業は、手つかずにされたままなのである。

さて、そもそも「プロスポーツ」とは何であろうか。ある体育・スポーツの専門書では「プロスポーツ」は「職業として行なわれるスポーツ。つまり、個性を発揮してより高度なプレーを争うことによって、社会にサービスを提供し、その代償として生計維持のための報酬を獲得しようとするスポーツ」と定義されている[5]。つまり、色々と修飾語はあるものの、この定義ではプロスポーツとは「スポーツ」である、ということになる。

だが、ここで言及されている「スポーツ」とはいったい何を意味するのだろうか。たとえば、「ウィンター・スポーツ」という表現であれば、「スキー」や「スノーボード」といった具体的な種目の類概念として理解できるが、「プロスポーツ」ではそのような意味で理解することができない。もしそう理解するなら、スキーヤーにはプロもアマも存在する以上、スキーは「プロスポーツであると同時にプロスポーツでない」ことになってしまう。そもそも「プロスポーツ（プロフェッショナル・スポーツ）」は、限定詞である「プロフェッショナル」と基底詞である「スポーツ」との合成語である。したがって、「スポーツ」という基底詞の意味が不明確である限り、上の定義は十分なものとは言えない。

一方で、上述のアマチュアリズムのイデオローグたちの言葉を借りれば、「プロスポーツはスポーツではない」とか、「プロスポーツは芸能娯楽である」ということになる。これらは「プロスポーツ」は「スポーツ」である、とする上の定義とは矛盾する考え方であろう。

このように、「プロスポーツ」という言葉は、未だに曖昧さを伴って人口に膾炙している。やっかいなことに、これは日常的な言語使用のレベルに限ったことではない。上で挙げた、「プロスポーツ」に関する研究の多くが、研究上の観点から「プロスポーツ」という言葉に名目的な定義を与え（あるいはそれすらも行わないまま）、プロ野球や J リーグ等の「具体的な対象」に関する実証的な分析を行うという手法をとっているのである。

こうした問題意識のもと、本研究は、「プロスポーツ」という対象を概念レベルで詳細に考察すること

---

3 これがいわゆる「アマチュア規定」[20]と呼ばれるものである。

4 特に重要なものとして、[1,4,13,14,26-28,33,35,37,39]等が挙げられる

5 文献内での表記は「プロ・スポーツ」[16]（p.1354）である。

で、その意味をより明確化することを目指すものである。そのための手順として、まず、基底詞としての「スポーツ」に着目し、「アマチュア・スポーツ」や「遊戯」との対比において、その概念的整理を試みつつ、哲学的方法としてのカテゴリー論を援用し、プロスポーツを「関係概念」として規定していくという方途をとる。こうした方法で「プロスポーツ」の意味を明確化することにより、かつてのアマチュアリズムの立場からのプロスポーツ批判に対し、遅まきながら一つの回答を提示することができるであろう。

まず次節で、「プロスポーツ」を構成する「スポーツ」、「プロフェッショナル」の両概念について、それぞれの語の起源に遡りつつ、両者の関係性について考察していく。

2.「スポーツ」と「プロフェッショナル」

「スポーツ」の概念に関する研究はこれまでにも多く存在するが、その中には、スポーツという語の起源を辿ることを議論の糸口とするものが少なくない。それらの研究[18,19,25,36]によって明らかになっているように、その原意は概ね「仕事やまじめな職業から離れて遊び戯れること」というものである。したがって、古い時代のスポーツには「冗談や歌、劇や踊り、チェスやトランプなどの一切の楽しみ」[19]（p.81）が含まれていたという。

だが、スポーツ概念は時代とともに変遷している[36]（pp.11-17）。現代においてのそれは、従来の「遊び戯れること」に加え、B. ジレ[10]の言う「闘争」、「はげしい肉体活動」などの要素が加わったより限定された意味で捉えられることが多いだろう。

樋口は、前者の語源論的な広義のスポーツ解釈と後者の現代的な狭義のそれとを区別し、前者をスポーツの語源的解釈、後者を近代的解釈としている。さらに、A. グートマンによるスポーツ分析を援用し、後者のように解釈されたスポーツを、「遊戯性」、「組織性」、「競争性」、「身体性」という四つの特性を持った活動と定義した。すなわち現代的な意味でのスポーツとは、「日常生活とは異なる意味連関をもつ特殊な情況の中で（遊戯性）、人為的な規則にもとづき（組織性）、他人との競争や自然との対決を含んだ（競争性）、身体的活動（身体性）である」[11]（p.31）とする。われわれは、議論の出発点として、このような近代的な意味における「スポーツ」の定義を採用することとする。

さて、すでに言及しているように、「プロスポーツ（プロフェッショナル・スポーツ）」は、「プロフェッショナル」という限定詞と「スポーツ」という基底詞とから成る合成語である。一般的に、限定詞と基底詞との関係は、前者が後者の「該当する範囲を限定する」[34]（p.910）というものである。「脊椎動物／無脊椎動物」という二つの言葉を例にとると、「脊椎」、「無脊椎」が各々の限定詞で、かつ基底詞は両者ともに「動物」ということになる。ここで二つの限定詞は共に「動物」という基底詞が指し示す概念の外延を限定する働きを持っている。すなわち、動物という概念の外延は、象、ライオンからアリやセミといった、あらゆる動物の全体集合であるが、「脊椎」という限定詞が付加されることで、その外延が「脊椎をもつ」という条件に該当する動物である象、ライオンなどの対象に限定されるのである。見方を変えれば、「限定詞＋基底詞」と「基底詞」のそれぞれによって指示される概念同士の関係は、いわゆる種概念と類概念の関係であるとも言える。

これをスポーツに当てはめて、樋口のようにスポーツ概念を現代的な狭義の解釈で捉えるならば、その外延は「野球」、「サッカー」、「バレーボール」、「バスケットボール」等のあらゆる「スポーツ」種目の集合と考えてよいであろう。そこでまず、これを限定する種概念として「屋内スポーツ／屋外スポーツ」の二つを挙げて考えてみよう。前者の内包は「屋内で行われる」であるから、外延にはバレーボールやバスケットボール等の屋内で行われるあらゆる種目が含まれ、後者には逆に「屋外で行われる」野球やサッカー等の種目が含まれることになる。

では、「プロフェッショナル・スポーツ（プロスポーツ）」という合成語の場合はどうなるだろうか。この点について考察するため、まず「プロフェッショナル」の概念について簡単に言及しておきたい。

すでに多くの論者によって指摘されているように、18 世紀イギリスにおける近代スポーツの誕生以降、「プロフェッショナル」という概念は「アマチュア」概念との対比において問題になってきた[6]。元来、アマチュアは「愛好者」、プロフェッショナルは「職業的」を示す言葉であるが、スポーツにおける両者は身分的観点において区別され、前者はジェントルマンであった貴族や新興ブルジョワジーの、後者はそれ以外の競技者を指して使われるようになった。その後、時代を経るにつれて身分的な意味は希薄になっていくが、両者は主として競技による金銭の授受の有無という観点から区別されるよう

[6] 以下の議論に関しては、[16,20,23,24,40]等を参照。

になる。すなわち、「アマチュア」とはスポーツに参加することによってなんら物質的利益を得ない者のことであり、その意味で金銭を得るプロフェッショナルと明確に区別された。

だが、「アマチュア」であることがIOCや各種目の国際競技連盟、各国のスポーツ競技団体の主催競技会の参加要件となり、プロフェッショナルが排除されるようなっていくと、アマチュア／プロフェッショナルの両概念は多義化していく。その混乱ぶりは、1963年当時のP.マッキントッシュの以下の記述から窺い知ることができる。

ある種目の競技では、アマチュアもコーチをすることに対しての謝礼が許されているが、他の種目ではそうではない。また同じ人が一種目以上のスポーツをコーチをしたり、試合をしたいと思うこともあるだろう。しかしながら、かつてホッケーのコーチをして手当を受け取った女性がアマチュア水泳連盟の規則のもとで開かれた水泳大会から除外されたことがある。

…ある種目のスポーツでプロフェッショナルであるものは、彼らが統括している種目においては自動的にプロであるが、しかし他方では、個人が管轄されている以外の競技団体のスポーツ種目においては、何をしてもわずらわされることはない…。だから、プロのサッカー選手が、アマチュアとしてテニスをすることはできるのに、水泳や陸上競技のすべてのアマチュアの大会からは除外されるということが起こった[23]（p.123）[24]（pp.175-176）。

こうした事例以外にも、旧社会主義圏では国家から報酬を受けることで選手生活を維持するいわゆる「ステート・アマ」が出現するなど、両概念の意味はますます不明確になっていった。

だがその後、1974年のオリンピック憲章から「アマチュア」の表記がなくなったことをはじめ、多くの競技団体において参加資格規程からアマチュアという要件が削除されていくと、両概念の競技団体ごとの多義化という状況は必然的に収束していった。現在では両概念はスポーツの文脈においてもより一般的な意味で理解されていると言える。すなわち、プロフェッショナルは「職業としてそれを行う人」[34]（p.2504）、すなわち職業としてスポーツを行う競技者であり、アマチュアは「職業としてでなしに、趣味や余技として携わる人」[34]（p.80）、具体的にはレジャーや運動部活動等においてスポーツに参加する人たちを指すのである。

このような、言わばプロフェッショナル／アマチュア概念の現代的な解釈をもとに、「プロフェッショナル･スポーツ（プロスポーツ）」／「アマチュア・スポーツ（アマスポーツ）」という二つの言葉によって「スポーツ」の外延がどのように限定されるのかを考察してみよう。「プロフェッショナル／アマチュア」の両概念を上のように理解するならば、「プロスポーツ／アマスポーツ」両概念の内包は、それぞれ「職業として行われるスポーツ／職業としてでなしに、趣味や余技として行われるスポーツ」ということになるだろう。

だが、上述したように、スポーツ概念の外延が「野球」、「サッカー」、「バレーボール」、「バスケットボール」等の競技種目の集合であるとすると、これらすべての種目は現に「職業として行われている」わけだから、すべてが「プロスポーツ」であるということになる。だが一方、これらの種目は同時に「職業としてでなしに、趣味や余技として行われる」こともあり、すべてが「アマスポーツ」でもあることになる。そして、こうしたことはその他の競技種目においても同様に当てはまることである。

このように、「プロフェッショナル／アマチュア」というそれぞれの限定詞は、スポーツ概念の外延を限定する機能を果たしているとは到底言えず、その意味では、「スポーツ」と「プロスポーツ」が類種関係にあると言うことはできないのである。

3. スポーツは遊戯なのか

前節の考察から明らかになったように、「スポーツ」と「プロフェッショナル」の両概念を通例的な意味で理解する限り、スポーツ、プロスポーツ両概念の間に類種関係が認められない、ということになる。われわれは、この矛盾をどのように理解すればよいのだろうか。

ところで、これと同様の矛盾は、スポーツと「遊戯」との関係を考察する際にも立ち現れる。これまでのスポーツ概念に関する数多の研究の中には、スポーツを「遊戯」という枠組みの中で捉えようとするものが少なからず存在した[7]。すでに述べたように、「スポーツ」という言葉の原意が、おおよそ「仕事やまじめな職業から離れて遊び戯れること」というものである以上、そうした傾向は当然だとも言えるだろう。だが、もしスポーツが「遊戯」であるならば、「職業として行われるスポーツ」は「スポーツ」でないことになってしまう。「プロスポーツ」はそ

[7] 代表的なものとして、[5,6,8,15,21-24] 等の文献が挙げられる。

もそも「スポーツ」ではないと考えるべきなのだろうか。本節では、前節で明らかになった問題をひとまず置いて、この問題についての考察から議論を始めたい。

スポーツを「遊戯」という枠組みの中で捉えようとする議論の中でも、代表的なものとしてディームのスポーツ論を挙げることができる。彼は遊戯（Spiel）を「目的に縛られることのないそれ自らのための行為であり、その意味で仕事とは対照的である」[9]（S.3）と規定する。さらに、シラーの「人間は、遊戯をする時においてのみ、完全なる人間である」、人間は自らの「美の理想像（Schönheitsideal）にしたがって」自らの遊戯を選ぶ、という言葉を引きつつ、遊戯を「実利実益を超えた価値」を追求する活動として捉え、スポーツを、そうした「遊戯の一現象」であると主張する[9]（S.5-6, 27）。こうした観点から、職業として行われるスポーツは「スポーツ」ではなく、その反対のものであるとし、さらに次のように述べる。

職業スポーツは確かに外見上スポーツ的な出来事にもとづいている。すなわち、競技的に、あるいは最高記録をめざしておこなわれる身体運動（Leibesübung）にもとづくものであり、さらに、多かれ少なかれ信頼しうる方法で、すなわち、法的に同一の規制によって勝負が争われる。しかしながら、意味の方向としては、別のものであり、まさに正反対のものである。ある人にとっては、同じ行為が埋め合わせ（Ausgleich）であり休日に行われるものであるのに対して、他の人にとっては、その同じ行為が仕事（Arbeit）であり出勤日に行われるものなのである―ある人にとっては内面的な高み（innere Erhebung）であり―他の人にとっては経済的によりよい生計維持（finanziell besserer Unterhalt）なのである[9]（S.26）。

このように、ディームにおいては、スポーツは非実利的な活動としての遊戯に含まれる概念であって、その意味でいわゆる「職業スポーツ」は決してスポーツではないとされる。こうした、スポーツを遊戯の下位概念として捉える議論は、ここまでラディカルではないにせよ、ディーム以外の論者[8,23,24]によっても為されてきている。事実、われわれが議論の出発点にすえた樋口によるスポーツの定義においても、「遊戯性」という要素が見られたのである。われわれは、プロスポーツを考察するにあたりこの問題をどのように理解すればよいのであろうか。

実は、その樋口自身がディームの参照したシラーの「遊戯」概念についての考察を行っている。樋口は、先の引用文の出典であるシラーのテキストを詳細に検討した上で、シラーの言う「遊戯」が、子供の遊戯やスポーツといった、通常の経験的な概念としての「遊戯活動」とは全く別の概念であると主張する。すなわち、シラーの言う遊戯とは、ディームらが理解したようなスポーツの上位概念としてのそれではなく、「人間存在の自由とか美といった状態のことであり」、両者の明確な区別は、「活動としての遊戯と存在原理としての遊戯性の区別」へとつながるという[12]（pp.82-84）。

樋口によれば、「活動としての遊戯」とは、J. ホイジンガやR. カイヨワによって論じられてきた「仕事でないもの、仕事に対立するもの、気晴らし」[12]（p.24）という意味の活動概念であるという。これは前の文脈で言えば前者のスポーツの上位概念に該当するものであろう。だが、繰り返し述べているように、スポーツをこのような「活動としての遊戯」の下位概念として規定してしまうと、「職業として行われるスポーツ」がスポーツに含まれないことになってしまう。

ここで、上述した樋口によるスポーツの定義を振り返ってみよう。われわれはその中において「遊戯性」という要素が含まれていることに着目したのであった。だが、そこで主張されているのはあくまで「遊戯」ではなく「遊戯性」である。

たとえば、野球における「ボールをバットで打つ」という行為は、実生活においては全く意味をなさない行為である。樋口によれば、彼の言う「遊戯性」とは、スポーツがそうしたルールの明確性や絶対性によっていわば実生活から隔離されている、という意味の概念である[12]（pp.25-26）。上で言及された「存在原理としての遊戯性」とはまさにこのことを指すのである[8]。

このように、「スポーツは遊戯である」という命題を、「スポーツは遊戯活動の下位概念である」と理解せずに、「スポーツはその存在原理として遊戯性をもつ」と理解することで、遊戯と「職業として行われるスポーツ」との間の矛盾が解消される。すなわち、「職業として行われるスポーツ」は「活動としての遊戯」ではないが、その存在原理として「遊戯性」をもつと考えることができるのである。

---

[8] なお、これに類似した議論として、佐藤[29]による「活動形態としての遊び」と「カテゴリーとしての遊び」の区別がある。

4. スポーツ概念の二つの範疇基盤

前節では、「スポーツは遊戯であるのか」という問題に対し、樋口の遊戯論を参照することで一定の解答を与えることができた。すなわち、スポーツは「活動概念としての遊戯」の下位概念という意味では「遊戯ではない」が、その存在原理として「遊戯性」をもつと言える。逆に、スポーツに関わる遊戯概念を、「存在原理としての遊戯性」としてではなく、単に「活動としての遊戯」と捉えてしまえば、「スポーツは遊戯である」という命題は単純には成立しなくなるだろう。こうした観点から樋口は以下のように述べる。

仮に、遊戯という概念を労働と対立するものと考える常識的な見解を採ってみれば、アマチュアの野球は遊戯だが、プロ野球は遊戯ではない、逆に見れば、アマチュアの野球は労働ではないが、プロ野球は労働であるということになって、同じ野球というスポーツが遊戯にも労働にもいかようでもなりうるのである[12]（p.112）。

第1節において、われわれは「プロフェッショナル」、「アマチュア」という限定詞が「スポーツ」という基底詞が指し示す外延を限定する機能を果たさず、野球やサッカーといった競技種目が「プロスポーツ」として捉えられると同時に「アマスポーツ」としても捉えられるという矛盾に直面した。上の樋口の指摘は、同様の問題構造を指摘するものと言えよう。こうした事態について樋口は以下のように理解しようとする。

つまり、野球という一定の構造を持ったスポーツがあって、それがアマチュアかプロか、すなわち遊戯か労働かというのは、その一定の客観的構造を持ったスポーツへの「人々の関わり方」ということになるのである[12]（p.112）。

アマチュア野球からプロ野球へ移ってプレイする選手は、その環境や置かれる立場はかわるにせよ、依然として野球の選手である。野球そのものには違いはない。つまり、スポーツを行う人がだれであろうと、スポーツは、あくまで客観的な構造の強さをすでにもっているのである。プロや高度化スポーツの善悪はいましばらく措いて、類型的なあるいは実体的な概念として本書ではスポーツをとらえる。このようにとらえることによって、スポーツは遊戯かどうかという問題は解消する。スポーツが明確な一定の構造を有したものとして存在する以上、われわれはいろいろなしかたでスポーツに関りうるのである[11]（p.25）。

アマチュア野球かプロ野球かということで野球というスポーツの客観的な構造に違いが生じるわけではない。違いはむしろ、それに対する「人々の関わり方」にある。このように考えれば、「アマスポーツ」や「プロスポーツ」という言葉の基底詞としての「スポーツ」も、客観的な構造をもった「実体的な概念としてのスポーツ」ではなく、そうしたスポーツと人々との「関係性」を指す言葉として理解出来るだろう。つまり、「アマチュア」や「プロフェッショナル」という言葉が限定する外延は、野球やサッカーといった「種目」の集合ではなく、「スポーツと人々との関係性」の集合なのである。

このように考えることで、われわれはスポーツという概念を二つの範疇基盤において把握することが可能になる。一つは樋口によって定義された、実体的な概念としてのスポーツであって、その内包は「遊戯性」、「組織性」、「競争性」、「身体性」であり、その外延は「野球」、「サッカー」、「バレーボール」、「バスケットボール」等諸々の種目ということになる。もう一つは、そうした実体的なスポーツと人々との関係性そのものであって、「プロスポーツ」や「アマスポーツ」の基底詞としての「スポーツ」である。したがって、「プロスポーツ」や「アマスポーツ」は、こうした「スポーツと人々との関係性」の下位概念ということになるのである。

5. カテゴリーとしての「実体」と「関係」

次にわれわれは、このスポーツ概念の二つの範疇基盤についてより考察を深めるために、それぞれを特徴づける「実体」、「関係」という二つの言葉に注目したい。一般的な言語使用の場面においては、「実体」は「（名称や外形に対する）正体。本体。実質。内容」[34]（p.1254）、「関係」は「あるものが他のものと何らかのかかわりを持つこと。その間柄」[34]（p.626）といった程度の意味で理解されていると考えてよいだろう。だが、西洋哲学においては、実体（substance）、関係（relation）という二つの言葉に対しより深く複雑な意味が付与され、重要な概念として捉えられてきた伝統がある。本研究においても、通俗的な言葉の理解を超え、哲学的な文脈における二つの言葉の意味内容を明確にした上で、それを基にスポーツ概念を捉え返すことが、プロスポーツの概念考察を深める重要なプロセスになると考えられる。

そこで、以下の議論では佐藤の体育・スポーツ

論[30,31]を参照し、上で述べた点についての考察を進めていくことにする。佐藤は、哲学的な方法を用いて「体育」、「スポーツ」両概念の詳細な分析を行っており、その中で、「実体」、「関係」は、「体育」、「スポーツ」両概念の論理的峻別を行うためのキー概念として用いられているからである。以下では佐藤の議論を参照しつつ、上で言及したプロスポーツ概念の二つの範疇基盤という視座の理論的な基礎付けを行っていくことにする。

まず、佐藤の体育・スポーツ論の理論的ベースとなっている「カテゴリー論」の説明から始めることとする。佐藤は、哲学研究の対象となる概念の分析において、「カテゴリー（範疇）」が果たす役割の重要性を強調している。カテゴリーというものについて、通常、われわれは、概念のうちで特に抽象レベルの高いもの、という程度の認識しかもっていないかも知れない。だが、その原義に立ち返るならば、カテゴリーをそうした次元に止まらない、重要な方法的意義を持った分析装置として理解することができる。

そもそも、カテゴリー（category）という語は、古代ギリシア語のkategoriaを語源とする。元来、「告発、告訴」といった裁判用語として用いられていたこの言葉は、アリストテレスによって初めて、哲学研究の道具（オルガノン）として位置づけられることになる[31]（pp.31-32）。彼は、命題（「PはQである」という形式の文）における述語部分の主語への連関のあり方を分析してパターン化し、そこから哲学史上名高い、1. 実体 2. 量 3. 性質 4. 関係 5. 場所 6. 時間 7. 状態 8. 所持 9. 能動 10. 受動[3]、という10個のカテゴリーを導き出した[9]。

命題における主語－述語連関のあり方は、いわば人間の「判断」の形式を示すものである。佐藤によれば、カテゴリーとはそうした様々な判断をそれとして可能たらしめる「潜在的構造の類型」[31]（p.32）を表すものなのである。

このカテゴリーという概念は、アリストテレスからカントによって批判的に継承される。帰納法に代表される経験的な方法に基づかない、対象のア・プリオリな認識の根拠を問う自身の認識論の中で、カントはカテゴリーに重要な位置づけを与えている。カントは、ア・プリオリな認識が成立するための条件として、「純粋直観による多様なもの」、「構想力による多様なものの綜合」、「純粋悟性概念」の三つを挙げるのだが、カテゴリーは、このうちの「純粋悟性概念」に相当するのである[17]（p.151）。

カントが挙げたア・プリオリな認識の成立三条件について、順を追って説明することにする。そもそもわれわれの感性認識は、「空間」、「時間」という形式に基づかなければ成立し得ない。カントは、この「空間」、「時間」こそ、われわれが対象を知覚する際のア・プリオリな純粋形式、すなわち「純粋直観」であるとし、感性認識成立の根本的条件として位置付けている[17]（pp.108-109）。

さて、この「純粋直観」においては、対象は未だ「PはQである」という判断形式によって把握されることなく、「多様なもの」としてわれわれの前に立ち現れる。この「多様なもの」はそれ自体としてはまとまりなく個々別々に見いだされるが、これら多様なものを結合してひとつの形象にする能力が、「構想力」なのである。しかし、対象が構想力によって「PはQである」という形式を得たとしても、それだけで「認識が成立した」とは言えない。PとQの結合が全く任意のものであるため、例えば「三角形は四角形である」というような、形式は満たしながらも真なる認識とは言えない結合も生じ得るからである。

したがって、真偽に関わる判断形式に基づく妥当な認識が成立するためには、こうした結合に必然的な統一をもたらす機能が必要となる。カントはこうした機能を「純粋悟性概念」であるとし、その方法的意図がアリストテレスのそれと同じであることを認めた上で、これをカテゴリーと名付けた。そして、四綱十二目にわたる表1の「カテゴリー表」において、これを表現したのである[17]（pp.152-153）[10]。

カントによれば、純粋悟性概念（カテゴリー）は、われわれのうちにア・プリオリに存在する認識要素であって、われわれが対象を思惟するための不可欠

表1　カントのカテゴリー表

1. 分量 Der Quantität	①　単一性 Einheit ②　数多性 Vielheit ③　総体性 Allheit
2. 性質 Der Qualität	①　実在性 Realität ②　否定性 Negation ③　制限性 Limitation
3. 関係 Der Relation	①　実体 Subsistenz—付随性 Inhärenz ②　原因 Ursache—結果 Wirkung ③　能動 Handelnden—受動 Leidenden
4. 様態 Der Modalität	①　可能 Möglichkeit—不可能 Unmöglichkeit ②　現実存在 Dasein—非存在 Nichtsein ③　必然性 Notwendigkeit—偶然性 Zufälligkeit

[9] 各カテゴリーの語訳については[31]（p.32）を参照した。

[10] カテゴリー表の表記法については、[31]（p.35）を参照した。

の機能である[17]（pp.205-206）。すなわち、カテゴリーこそは「多様なもの」の結合に必然的な統一をもたらす、われわれの判断における論理的機能なのである。

こうした、アリストテレス－カント以来の伝統的な哲学的概念としての「カテゴリー」を、佐藤は、自身の体育論における中心的な方法として位置付けている。自然科学において、現実を分析するための道具として「実験装置」が存在するように、哲学研究の対象たる概念分析において、カテゴリーはまさに「分析装置」として機能することになる、と主張するのである[31]（p.35）。

こうした観点から、佐藤は、カントが提示したカテゴリー表に基づき、体育概念の分析のための派生的な「戦略・戦術カテゴリー」を展開していく。その戦術カテゴリーの一つとして展開されるのが、まさに「関係―実体」なのである。

「実体」は、カントのカテゴリー表の十二目にも含まれる基本的カテゴリーであり、そのカテゴリー的把握の淵源はアリストテレスにまで遡る。その特性は、「他のいかなる基体の述語ともなりえない」（自体性・自存性）、「これと指し示される存在であり且つ離れて存しうる」（離存性）といった点にあり[2]、こうした理解に基づき、佐藤は、「対象を『自体性』『自存性』『離存性』といった視点・視座で把握しようとする際の論理的機能」[31]（p.92）として「実体」カテゴリーを規定する。

「関係」もまた、カントが提示した主要カテゴリーの一つである。先のカテゴリー表において、「原因―結果」、「実体―付随」、「能動―受動」といった対概念の組み合わせによって表現されることからもわかるように、「関係」カテゴリーは「二つ以上の思考の対象を何らかの点で統一的にとらえようとする際の視点・視座」[31]（p.93）として捉えることができる。

「実体」、「関係」の両カテゴリーをこのように把握した上で、佐藤は両者を明確に区別することの重要性を指摘する。佐藤によれば、両カテゴリーは、「実体∩関係＝∅」、すなわち積集合を持たない「互いに素」となるような関係にある。したがって、実体カテゴリーを範疇基盤とする経験的概念を「実体概念」、関係カテゴリーを範疇基盤とする経験的概念を「関係概念」とするなら、両者は互いに置換不能の「離隔概念」になるという[31]（pp.93-94）。どういうことか。

例えば、A、B、C という人物がいて、3 人の間に

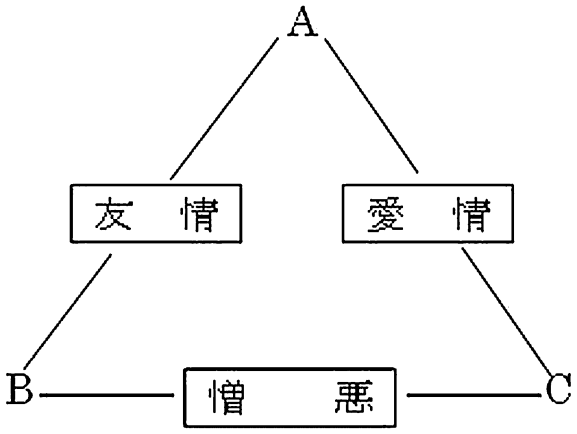

図 1　実体概念と関係概念

図 1 のように「友情」、「憎悪」、「愛情」という情感が芽生えたとする。この場合、3 人の人物の方は、一人ひとりが離存的でそれぞれ自体性を有する存在として把握できるため、実体概念として捉えることができる。一方、「友情」、「憎悪」、「愛情」といった情感の方は、それぞれ A、B、C 三者の間の関係としてしか生来しないものであり、その意味で関係概念として理解することができる。この場合、「友情」や「憎悪」といった情感的事象を、A、B、C という個別の存在者に還元することはできない。実体と関係が離隔概念であるというのは、まさにこうした意味においてなのである[31]（pp.93-94）。

6.「体育」と「スポーツ」の概念的峻別

前節で述べたような考察を踏まえ、佐藤は「体育」、「スポーツ」の概念的峻別へと議論を展開していく。以下でそのあらましをまとめてみよう。

まず、「体育」は、その言葉の出自が「身体教育」を意味する近代欧米語から工夫された翻訳語にあることからも分かるように、本来的には「教育」の一種、すなわちその「下位概念」であると考えることができる[11]。したがって、体育の概念的特性を明らかにするためには、まず教育のそれについて考察することが有効である、と佐藤は考える。

さて、そもそも「教育」とは「教え育てること」なのだから、そこには「教え育てる人」と「教え育てられる人」との間の「能動―受動」の関係性が想定されることになる。この「能動―受動」こそは、まさにカントのカテゴリー表において、「実体―付随性」、「原因―結果」とともに、「関係」の中に位置づくカテゴリーであった。すなわち、教育とは、「教え育てる人」（能動者）と、「教え育てられる人」

[11] わが国における「体育」という用語の成立過程については、同じく佐藤の著作[31]（pp.44-51）の中で詳しく述べられている。

（受動者）との間の「関係」としてのみ成立する事象であり、その意味で関係概念として捉えることができる。したがって、教育の下位概念である体育もまた、関係概念として規定することができるのである[31]（pp.86-89）。

こうした考察を踏まえ、最終的に佐藤は「体育」を以下のような関数式によって定義づける。

PE=f(a', b', c' |P')

（PE：体育、a'：作用項、b'：被作用項、c'：媒体項、P'：目的・目標、｜：条件）[31]（p.216）

すなわち、体育とは、「教える人」（作用項）、「教えられる人」（被作用項）、「教授内容」（媒体項）のそれぞれが、「ヒトの身体面からの人間化」という目的のもとに「関係性」を構成したときに成立する「関係概念」なのである。

一方の「スポーツ」について、佐藤はこれを「実体概念」として捉えている。スポーツが実体である、とはいったいどのようなことであろうか。

佐藤のスポーツ論は、「スポーツは文化である」と規定するところから出立する。そもそも文化（culture）とは、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」[34]（p.2506）であり、人為的所産であるスポーツもまた、その意味で文化のうちに含まれると考えることができるからである。

さらに佐藤は、文化というものの最大の特徴として、人間が造り出したものでありながら、人間そのものからは独立した構成体と化して、逆に人間のあり方を規定してしまう、という独自の存在性を挙げる。このことは法律を例に挙げると分かりやすい。法律は、確かにわれわれ人間がつくったものに他ならないが、一旦出来あがった法律は、逆にわれわれの生活全般に渡る支配力を持つことになる。すなわち、われわれが生み出した法律という文化が、あたかもわれわれからは独立した「実体」であるかのように立ち現れるのである[30]（p.8）。

佐藤は、こうした、人間が自ら造り出したものによって逆に支配され規定されるといった関係様態こそ、ヘーゲルやマルクスが提示した「疎外 Entfremdung」に他ならないと主張する。「疎外」とは、「人間主体による自らの制作物の『外化 Entäußerung』、およびこの外化された人為的制作物による人間の『支配』あるいは『拘束』という二重の関係構造」を意味するのであり、こうした「疎外」が構造的に介在している事物・事象こそ、「疎外態」と呼ばれるものである[31]（pp.125-126）。

「疎外」という文化の本質的な構造に着目することで、佐藤は文化そのもの、さらにはそこに含まれるスポーツもまた、「疎外態」であると規定する。スポーツが「実体概念」であるという主張は、まさにこうした見方によるものである。文化としてのスポーツは、われわれ人間からは独立した自存的、離存的な構成体、すなわち「実体」として捉えることができる、ということである。

われわれはここまで、佐藤の議論を参照し、「実体」、「関係」の両概念がアリストテレスからカントに至る西洋哲学の伝統において重視されてきた「カテゴリー」の一種として位置づけられること、さらにそれが「体育」と「スポーツ」の概念的峻別を行うための分析装置として、重要な役割を果たすものであることを確認してきた。こうした点を踏まえ、先に提示した「実体的な概念としてのスポーツ」と「スポーツと人々との関係性」というスポーツ概念の二つの範疇基盤を再解釈してみれば、前者を実体概念、後者を関係概念として理解することができる。そして、「プロスポーツ」や「アマスポーツ」の概念もまた、「スポーツと人々との関係性」の下位概念であるという意味において、すなわち「関係概念」として把握することができるのである。

7. スポーツ構造

前節において、われわれは佐藤の議論を踏まえ、「実体的な概念としてのスポーツ」と「スポーツと人々との関係性」というスポーツ概念における二つの範疇基盤を、それぞれ実体概念、関係概念として理解することができた。

この両者の関係は、後者の「関係性」の中に「実体」としての前者が位置づく、というものであり、前者は後者のうちに含まれる重要な要素の一つだと考えることができる。この最終節では、実体概念としてのスポーツの概念構造についてさらに考察を進めていくこととする。

第3節において、われわれは樋口の議論を参照し、実体的なスポーツ概念をある種の「客観的な構造」をもった存在として理解できることを示唆した。では、その構造とはどのようなものなのだろうか。実はこの点についても、佐藤が詳細な考察を行い、そうした構造の定式化を試みている。

…通常、われわれは、われわれの目の前に展開している運動現象をスポーツそのものであると思いなしている。しかし、スポーツが文化だとするなら、われわれからは独立した独自の「構成体」として存在している、と考えなければならないことになる。…われわれはここで、この文化的構成体としてのス

ポーツに対し、「スポーツ構造」という名称を与えることで、目に見える運動現象としてのスポーツ、すなわち「スポーツ現象」との概念上の区別を明確にしておきたい[30]（p.8）。

ここで着目すべき点は、佐藤が彼の言う「スポーツ現象」と「スポーツ構造」とを明確に区別していることである。「スポーツ現象」とは、われわれがスポーツ、例えばサッカーを見る場合に現前する、キック、ドリブル、ヘディングといった具体的な運動現象の位相を指す示す言葉である。こうしたスポーツ現象は、「実に多種多様、千差万別、同一の事象は二度と起こらない『一回性』の世界である」[30]（p.8）。それに対し、「スポーツ構造」とはそうしたスポーツ現象をそれとして生起させる人為的に構成されたシステムである。それは、ちょうど学問が個々の人間からは独立した「知識体系」を構成し、芸術が個々の人間から独立した「作品体系」を構成しているのと類比的に捉えられる。そして、移ろい行くスポーツ現象ではなく、スポーツ構造を考察の対象にすえることで、われわれは現象を生起させる根拠自体を分析することが可能になるという[30]（p.8）。

佐藤によれば、スポーツには人間のもつ知的、感性的、身体的な、それぞれの能力が対象化されており、スポーツ構造は、そうした対象化された諸能力の形式（Form）である知的契機、感性的契機、身体的契機が相互規定的に関連し合う複合的構成体として把握できるという。すなわち、知的契機とは、ルールや戦略・戦術、スポーツ器具、トレーニング法といった、スポーツ文化に固有の知的営為の所産であり、感性的契機とは、スポーツマン・シップや武士道といった価値観であり、身体的契機とは、「背面跳び」、「ベリー・ロール」といった、客観化された身体技法としての「運動形式 movement form」である[12]。こうした三契機が相互規定的に関係し合うことでスポーツ構造を構成しているのである[30]（pp.8-10）。

こうした観点をわれわれの議論に引き付けて考えてみよう。たとえば、プロサッカーとアマチュア・サッカーの試合を見比べるとする。その際、それぞれの場面において具体的に生起するスポーツ現象に着目すれば、当然のことながらわれわれは全く違った運動現象が生起するのを目の当たりにするだろう。だが、一度その背後にあるスポーツ構造に焦点を当てれば、そこには同一の構造が浮かび上がってくるはずである。個別具体的な運動現象として眺める時、全く別の現象が生起しているように見える二つの試合であっても、それらは共に、「インサイドキック」、「バイシクルシュート」、「エラシコ」等の運動形式、手の使用の禁止やオフサイドを定めた独自のルール、ゾーンプレスやフラット 3 等の戦術、負傷者の発生時に意図的にボールをフィールド外に出し、その後のスローインを相手に返す慣習等の、サッカー固有の諸形式を前提に生起していることに気付く。こうした形式こそ、樋口も言及していたプロスポーツ、アマスポーツに共通する「客観的な構造」であると捉えることができるのである。

8. 結　語

本研究は、「プロスポーツ」という言葉が曖昧さを伴って人口に膾炙しているという現状認識のもと、「プロスポーツ」という対象を概念レベルで詳細に考察することで、その意味をより明確化することを目指してきた。まず、基底詞としての「スポーツ」に着目し、「遊戯性」、「組織性」、「競争性」、「身体性」という四つの特性を持った活動として定義した上で、「プロフェッショナル」、「アマチュア」、「遊戯」といった概念との関係性を検討していった。その結果、スポーツは、「実体的な概念としてのスポーツ」（実体概念）と「スポーツと人々との関係性」（関係概念）という二つの範疇基盤において把握することができ、「プロスポーツ」は後者の下位概念にあたることが明らかとなった。

最終節で述べたように、「実体概念としてのスポーツ」は、知的契機、感性的契機、身体的契機が相互規定的に関連し合う複合的構成体としての「スポーツ構造」として理解できる[13]。したがって、「関係概念としてのスポーツ」の下位概念にあたる「プロスポーツ」は、そうしたスポーツ構造が、ある種の人々との特定の関わり合いにおいて現象化する、そうした「関係性」として捉えることができるのである。その関係性が具体的にどのようなものであるのか。この問題については稿を改めて取り組んでいくことになるが、それが「プロフェッショナル」すなわち「職業」という概念と深く関わるものである

[12] 身体的契機に関して、参照した佐藤の文献[30]の中では、「運動様式 movement form」と表記されている。一方、後の論稿[31]（p.243）、[32]（p.55）等において、佐藤は同様の概念を示すのに「運動形式」という語を用いている。こうした点を踏まえ、本稿では用語を「運動形式」に統一することとした。

ことは間違いのないところだろう。

最後に、本研究において明らかとなったプロスポーツの概念規定を踏まえ、冒頭において提示したアマチュアリズム・イデオローグからの批判に対する反論を試みたい。

第一に挙げたのは、ディームによる「プロスポーツはスポーツではない」というテーゼであった。まず、ここで言われている「スポーツ」という言葉が何を意味するのか、本研究で提示したスポーツ概念の二つの範疇基盤と照らし合わせて検討してみよう。

上のテーゼにおける「スポーツ」を、知的契機、感性的契機、身体的契機が相互規定的に関連し合うスポーツ構造、すなわち「実体概念としてのスポーツ」として理解するならば、ディームは全くもって「正しい」主張をしていることになる。なぜなら、既に述べた通り、プロスポーツという名辞は「スポーツと人々との関係性」すなわち「関係概念」として把握されるのであり、実体概念と関係概念は互いに置換不能の離隔概念なのであって、その意味ではまさしく「プロスポーツはスポーツではない」と言えるのである。

だが、ディームが、上示したような実体概念としての意味で「スポーツ」という言葉を使用しているとは考えにくい。そうだとすれば、まさに「アマチュア・スポーツ」もまた、それが関係概念である以上、「スポーツではない」ことになってしまう。ディームという人物の立場から考えて、そうした主張することはおおよそ考えい難い。そうではなく、ディームは「スポーツ」という言葉を関係概念として、すなわちスポーツと人々とのある特定の関係性を表すために用いている。先述したように、彼が「スポーツ」を「遊戯」の下位概念と捉えていたことからも、その関係性が「アマチュア・スポーツ」を指すものであることは明らかであろう。したがって、彼の主張は「プロスポーツはアマチュア・スポーツではない」、すなわち、「プロスポーツ≠アマスポーツ」という、当たり前の事実を言っているのに等しいものなのである。

ブランデージによる、「プロスポーツの記事はスポーツ欄に載せるべきではない」といった主張もまた、ディームの主張と同様に理解することができる。ブランデージが「スポーツは余技」であると言い、「自分の楽しみ」、「リラックス」、「気晴らしや娯楽」、「健康」といったものをその本来的な目的として列挙していることからも、彼がアマチュア・スポーツをスポーツのあるべき姿として捉えていることは明らかである[7] (p.17)。そうした彼の立場からすれば、新聞のスポーツ欄に載せるべきはアマスポーツの記事のみであり、プロスポーツはそれとは異質なものとして排除されるべきである、といった主張が為されるのは、至極当然のことと言えよう。

このように見てくると、ディームやブランデージといった人々の主張が、アマチュア・スポーツという、スポーツを巡る特定の関係性のみを特権化し、プロスポーツというもう一つの関係性を、「スポーツ」の名の下から排除しようとしたものであったことがわかる。こうした主張はしかし、スポーツに関わる一つの「価値判断」に過ぎないのであって、決してスポーツそのものに関わる「事実判断」ではないのである。

付　記

本研究の一部は、平成 23 年度体育科学系研究プロジェクト「プロスポーツ概念の原理論的研究」への助成に基づき行われたものである。

文　献

1） Allmen P (2006): The Economics of Individual Sports: Golf, Tennis, Track, and NASCAR. (Ed.)

---

[13] 上述したように、スポーツ構造は、個々の人間からは独立した、人為的に構成されたシステムとして存在する。その意味でそれは、自存的、離存的な実体概念として把握することができるのである。これに対し、スポーツ構造が、知的契機、感性的契機、身体的契機が相互規定的に関連し合う複合的構成体であるという点に着目し、これを関係概念として捉える主張もあるだろう。スポーツ構造という対象のみに分析視点を限定するならば、こうした見方はあながち見当違いとは言えない。このことは、上で挙げた A、B、C という 3 人の人物と、その間に生まれる「友情」、「憎悪」、「愛情」等の情感を用いた実体、関係両概念の説明についても同様に当てはまる。この場合、上では実体概念として把握された人物 A、B、C もまた、例えばそれぞれの「人体」という位相に分析視点を定めれば、それは循環器系、消化器系、神経系、呼吸器系、免疫系等のシステムから成る複合的構成体として理解することができ、その意味で関係概念として把握することも可能なのである。

ここで重要なのは、「カテゴリーの相対性」について理解することである。われわれの設定する「実体」、「関係」といったカテゴリーは、あくまで分析のための視点・視座であり、分析対象に癒着、固着させてしまってはならない。本研究における分析は、「プロスポーツ」という概念との対比においてスポーツ構造を捉えるものであり、したがってそれは、プロスポーツという関係性の中に位置づく「実体」として把握されるのであるが、そうした視点もまた相対的なものであることを忘れてはならないのである。

Fizel J (In) Handbook of Sports Economics Research. M.E. Sharp, Armonk, 149-169.
2） アリストテレス（出隆訳）（1968）：形而上学（アリストテレス全集第 12 巻所収）．岩波書店、東京、154.
3） アリストテレス（山本光雄訳）（1971）：カテゴリー論（アリストテレス全集第 1 巻所収）．岩波書店、東京、6.
4） Barget E (2006): The Economics of Tennis. (Ed.) Andreff W and Szymanski S (In) Handbook on the Economics of Sport. Edward Elgar, Cheltenham, 418-431.
5） ブランチャード･チェスカ共著（大林太良監訳･寒川恒夫訳）（1988）：スポーツ人類学入門．大修館書店、東京.
6） Blanchard K and Cheska AT (1985): The Anthropology of Sport: An Introduction. Bergin & Garvey, South Hadley.
7） ブランデージ（宮川毅訳）（1972）：近代オリンピックの遺産．ベースボール・マガジン社、東京.
8） カイヨワ（多田道太郎・塚崎幹夫訳）（1990）：遊びと人間．講談社、東京.
9） Diem C (1969): Wesen und Lehre des Sports und der Leibeserziehung. 5 Aufl., Weidmann, Dublin.
10）ジレ（近藤等訳）（1952）：スポーツの歴史．白水社、東京、17.
11）樋口　聡（1987）：スポーツの美学．不昧堂出版、東京.
12）樋口　聡（1994）：遊戯する身体．大学教育出版、岡山.
13）樋口美雄（1993）：プロ野球の経済学．日本評論社、東京.
14）広瀬一郎（2004）：「J リーグ」のマネジメント．東洋経済新報社、東京.
15）ホイジンガ（高橋英夫訳）（1963）：ホモ・ルーデンス．中央公論社、東京.
16）今村嘉雄ほか編（1986/1976）：新修体育大辞典（第 4 版）．不昧堂出版、東京.
17）カント（篠田英雄訳）（1961）：純粋理性批判（上）．岩波書店、東京.
18）岸野雄三（1972）：スポーツの技術史序説．（編）岸野雄三ら「スポーツの技術史」、大修館書店、東京、2-37.
19）岸野雄三（1977）：スポーツ科学とは何か．（編）朝比奈一男ら「スポーツの科学的原理」、大修館書店、東京、78-133.
20）岸野雄三編（1987）：最新スポーツ大辞典．大修館書店、東京、27-31.
21）ロイ（1988）：スポーツの本性 概念規定への試み．（編）ロイら（粂野豊編訳）「スポーツと文化・社会」、ベースボール・マガジン社、東京、38-56.
22）Loy JW (1981): The Nature of Sport: A Definitional Effort. (Ed.) Loy JW et al. (In) Sport, Culture and Society: A Reader on the Sociology of Sport. Lea & Febiger, Philadelphia, pp. 23-32.
23）マッキントッシュ（寺島善一ほか訳）（1991）：現代社会とスポーツ．大修館書店、東京.
24）McIntosh PC (1963): Sport in Society. Watts, London.
25）水野忠文（1977）：スポーツとは何か．（編）朝比奈一男ら「スポーツの科学的原理」、大修館書店、東京、1-76.
26）武藤泰明（2006）：プロスポーツクラブのマネジメント．東洋経済新報社、東京.
27）中島隆信（2003）：大相撲の経済学．東洋経済新報社、東京.
28）大坪正則（2002）：メジャー野球の経営学．集英社、東京.
29）佐藤臣彦（1987）：遊びとは何か．（編）中村敏雄ら「体育原理講義」、大修館書店、東京、45-55.
30）佐藤臣彦（1991）：体育とスポーツの概念的区分に関するカテゴリー論的考察．体育原理研究 22 : 1-12.
31）佐藤臣彦（1993）：身体教育を哲学する―体育哲学序説―．北樹出版、東京.
32）佐藤臣彦（1996）：体育とスポーツの概念的区分とその考察．いばらき健康・スポーツ科学 15 : 46-56.
33）澤井和彦（2008）：スポーツリーグのマネジメント．（編）原田宗彦ら「スポーツマネジメント」、大修館書店、東京、146-171.
34）新村　出編（2008）：広辞苑（第 6 版）．岩波書店、東京.
35）Shmanske S (2004): Golfonomics. World Scientific, River Edge.
36）菅原　禮（1980）：スポーツとスポーツ･ルール．（編）菅原　禮「スポーツ規範の社会学」、不昧堂出版、東京、9-73.
37）Szymanski S and Zimbalist A (2005): National Pastime: How Americans Play Baseball and the Rest of the World Plays Soccer. Brookings Institution Press, Washington, D.C.
38）高林喜久生（2004）：「今年も阪神優勝！」の経

済学．光文社、東京、116-117.
39）Tenorio R (2006): The Economics of Professional Boxing Contracts. Journal of Sports Economics 1 : 363-384.
40）内海和雄（2007）：プロ・スポーツ論―スポーツ文化の開拓者―．創文企画、東京、14-15.